



# 「やまなし歴史の道」探訪を深める3つの視点

令和2年度から取り組んだ「やまなし歴史の道 ツーリズム事業」では、歴史の道22道の中から、甲州街道、富士道(谷村路)、秩父往還、棒道、みのお道について、各道が残してきたストーリー(物語)をテーマに据えたモデルコースを設定しました。もちろん本誌で紹介する以外にも、幾つもの魅力的なコースが想定できるでしょう。思い思いのテーマを見いだして、当時の道を歩いた人々の気持ちを想像したり、「もの」や「ひと」が行き交い生まれた痕跡や、伝承された逸話を聞いたりしながら、歴史の道を探訪し、

語りあう。このように物語を知り、学び、楽しむことが「やまなし歴史の道ツーリズム」の醍醐味です。

多様な事象を包含した歴史の道を知り、学ぶためのアプローチは人それぞれかもしれませんが、ここでは複数の道に共通する「もの・ひと・文化の行き交う道」「祈りの道」「サムライ文化の道」という3つの視点を提示しました。歴史の道とふれ合う糸口になるでしょう。

## モデル5道と3つの視点

視点 \ 5道	甲州街道	富士道 (谷村道)	秩父往還	棒道	みのお道
もの・ひと・文化の行き交う道	◎	○	○	○	○
祈りの道	○	◎	○	●	◎
サムライ文化の道	○	●	◎	◎	●

- ◎: 視点に深く関わる道
- : 視点に関わる道
- : 視点に一部関わる道



甲州街道 笹子峠矢立の杉



富士道 金鳥居



秩父往還 永昌院からの眺望

## もの・ひと・文化の行き交う道

「甲斐の国」の「甲」は甲乙丙の一番を示し、「斐」はあでやかな着物の模様、素晴らしい、美しいことを表します。奈良時代の初め(8世紀初頭)、大和朝廷が中国の印章文化を取り入れるに当たって国名を漢字二文字に統一した際、もともとあった「かひ」という国名に、こうした“一番美しい国”という字を当てたのが、「甲斐の国」の起りではないかと考えられています。

この「かひ」という国名には、山梨の歴史の道の特徴が隠されています。過去の研究では、由来は「峡(かい)」、すなわち山間を示す言葉だと考えられてきましたが、近年では「交ひ」だと分かってきました。すなわち、交流・交通の「交」です。この「交ひの国」という考え方こそ、甲斐国の歴史を振り返る上では大切な視点となります。山々に囲まれた甲斐の国にとって、「交」の基盤である「道」は、国の名前の起りになるほど重要な事柄なのです。

甲斐国の地勢を俯瞰すると、南には海沿いを東海道、北は東日本を山沿いにつなぐ東山道・中山道が通り、甲斐国は海と山を横に往く道を縦につなぐ場所に当たります。甲斐国の道は、山の道と海の道をつなぐ数少ない重要な縦線であり、我が国の東西を分ける場所だったともいえるでしょう。東や西から入ってきたものが北上し、南下する。あるいは、北や南から入ってきたものを、東西に運んでいく。甲斐国は、様々な方向から「もの」や「ひと」が入ってきて、「もの」や「ひと」が交差する場でした。

武士の時代になると、武将らは甲斐国の支配を巡って激しく争います。山沿いの東西を行き来するルートと海沿いの東西を行き来するルート、そしてそこ

をつなぐ道こそ軍事戦略の鍵であり、日本を治めるためには甲斐国を押さえることが極めて重要だったのです。

江戸時代の中・後期(18世紀-19世紀前半)になると、天下泰平の訪れと共に、流通の道としての役割が重要になりました。甲斐の国を東西に貫く甲州街道、他にもそのほぼ中心から南に向かって延びる富士川水運をはじめとする道が新たに整備されます。

これらの道を多くの農産物や海産物、工芸品が行き交いました。甲州の年貢米を江戸へ送る「廻米(かいまい)」は、主に富士川を通過して舟で南下して、駿河湾から江戸蔵前へと廻され、駿河湾の塩は富士川を通過して北上し、甲斐国内や信州に運ばれていきました。海産物は馬の背に積まれ、荷を運ぶ人馬が山梨や長野に向けて出発し、中道往還などを進んだり、舟に積み込まれて富士川からもたらされたりしたといえます。こうして海の無い山梨に海の魚や貝を食べる文化が定着しました。また、甲斐絹、印伝などの工芸品は、甲府から江戸へ流通し、江戸の洒落者や甲州街道を行き交う旅人たちが身につけて歩きました。

「もの」だけでなく、旅人や商人、芸能者や文化人など、様々な人々も往来しました。

こうして「もの」や「ひと」が行き交うことで、甲斐国独特の「文化」が醸成されていきます。「やまなし歴史の道」は、古代から今にいたるまで、武将たちや権力者たち、市井の人々や文化人たちにとって、「もの」や「ひと」、そして「文化」が行き交う大切な舞台であり続けてきました。